

老舗と時代変遷について

—京都の老舗を事例として—

欧陽 金蓮

100年以上事業を継続する小売店舗や企業・組織を「老舗」と捉えると、世界的に見て日本には老舗が多く存在することが知られている。とりわけ京都には老舗が多い。794（延暦13）年に長岡京から遷都した平安京が1869（明治2）年に政府（太政官）が東京（旧江戸）に移転するまで1076年間首都であったことと無関係ではない。首都の発展と老舗創業との関係を立地の視点で捉える試みである。

「京の老舗の会」（2012（平成24）年3月21日設立）は、老舗企業を毎年表彰し「京の老舗表彰受彰企業一覧」を公表している。その1,945社のデータに基づいて創業年代と業種、立地の変遷を整理・分析する。これによって老舗の特徴を明確にする。業種分類は総務省の日本標準産業分類に従ったため、創業当時の業種を表すものではない。

京都御所を中心に4象限（北東・北西・南西・南東）に分けると、以下のことがわかる。北東地域では江戸時代17世紀の間に老舗企業が京都御所の東方向の発展した。江戸時代末期19世紀と明治時代の間に老舗企業の発展がだんだん東北の方向に移転していて、主に高野川の周辺に分布していた。

北西地域では平安遷都以降応仁の乱開始以前に京都御所の北方向に急速に発展した。江戸時代17世紀には京都御所の西北地域の卸売業・小売業に従事する老舗企業の数が多く、次第に京都御所の近く方向に発展していった。安土桃山時代から江戸時代18世紀までの間に京都御所の北西方向へ発展した。江戸時代19世紀から大正時代までに京都御所の西方向の新興産業地域と北方向の伝統産業地域が段々交わるようになっていた。また、その発展していた間に運輸業・郵便業と電気業など新興産業が生まれた。

南西地域は、応仁の乱開始以降室町時代時代に主に桂川に沿って発展していた。応仁の乱など不安定な時代でも発展できた。他の時代には老舗企業は主に京都御所の南方向の地域に集中していた。時代と共に市場経済は段々に西方向に移っていった。卸売業・小売業も西方向に発展していた。南東地域では応仁の乱開始以前、南方向の経済がとても繁栄していた。主に鴨川の西側に集中していた。その後、鴨川の東側に移っていった。

南東地域では、卸売業・小売業は主に京都御所の2～3キロメートルの地域に位置する。最大限に消費者と接触できていた。

製造業を見ると、北西地域では近代化になってと共に製造業の発展は段々に京都御所と離れて西北方向に移った。南西地域では伝統製造業は主に京都御所の南地域に集中していたことがわかる。南東地域では製造業は主に京都御所の南地域と西南に集中していた。また、次第に東地域に移っていた。

これらの分析から、老舗は時代の流れ、社会のニーズに柔軟に対応して立地していることがわかる。